

略 歴

小田島由義 おだしまゆぎ 1845-1920

弘化2年 尾去沢内田富字の末子として生まれた。幼名を丑太郎と称した。
 安政4年 小田島徳兵衛の養子となり、盛岡に出て文武の道に励んだ。
 万延元年 養父の死と共に家業を継いだ。19歳で盛岡作人館入学。
 慶応3年 戊辰の役で花輪隊の総締役として活躍し、また戦後の処理にあたった。
 明治2年 長嶺村和田に移住し農業を継いだ。名を徳弥と改めた。
 明治3年 花輪寸陰館長。明治5年工部省鉱山局に任官し国内の諸鉱山を視察した。
 明治17年 鹿角郡長、明治19年雄勝郡長、明治21年～30年再び鹿角郡長を勤めた。
 大正元年 同年より8年まで花輪町長。 大正9年7月29日死去、享年76歳。

浅井小魚 あさいしょうぎょ 1875-1927

明治8年 大湯丁内瀬川子之の末子として生まれた。明治29年浅井家の養子となった。
 明治24年 キリスト教の洗礼を受け、明治36年大湯ハリストス正教会管理者となった。
 明治38年 この頃から俳号を小魚と称し、碧梧桐に師事し俳句の創作活動に入った。
 大正2年 井泉水の影響を受けて無季の俳句を作った。(晩年は正調に戻った)
 大正5年 この頃俳画を描き、大湯郷土人形を彫ったりした。鹿角地方の郷土史資料蒐集を精力的に行った。
 昭和7年 大湯環状列石の発見者となり、保存・調査活動の中心となった。
 昭和22年 9月9日死去、享年72歳。 昭和37年 大円寺に「秋立つや」の句碑建立。

田村徳治 たむらとくじ 1886-1958

明治19年 花輪の根市富之助三男として生まれた。明治34年花輪小津教員を勤めた。
 明治36年 秋田師範入学、明治40年秋田明德小訓導、明治41年田村家の養子となった。
 大正2年 東京高師入学、大正5年京都大学政治科首席卒業、御賜の銀時計を戴いた。
 大正9年 京都大学助教授、大正11年独英仏に渡欧留学した。
 大正13年 京都大学教授となり、日本にはじめて行政学講座を創設した。
 昭和3年 法学博士となった。昭和8年京大事件で同大学を辞職した。
 昭和9年 以降、立命館大学、関西大学講師。同志社大学、関西学院大学教授など歴任。
 昭和29年 大著「日本の興隆」、発行。 昭和33年11月25日死去、享年72歳。

大里武八郎 おおさとぶちろう 1872-1972

明治5年 花輪、大里寿三男として生まれた。
 明治25年 上京し、成立学舎、一高、東京帝大法学科卒業。
 明治38年 39、41年と3回に渡り、清国国政調査員として内藤湖南に随行し、その片断となって調査した。その間、弁護士をしながら本郷区丸山福山町に居住した。
 明治42年 臨時台湾旧慣調査委員を委嘱され渡台し、台北に定住した。
 大正元年 台湾総督府法院判官に任ぜられ、台北、台中、台南の各地方法院を歴任。
 昭和8年 台北地方法院長。昭和10年同退任、晩年は鹿角方言の研究に没頭。
 昭和42年 花輪町名誉町民第一号となった。 昭和47年3月24日死去、享年101歳。

渡部繁雄 わたなべしげお 1886-1976

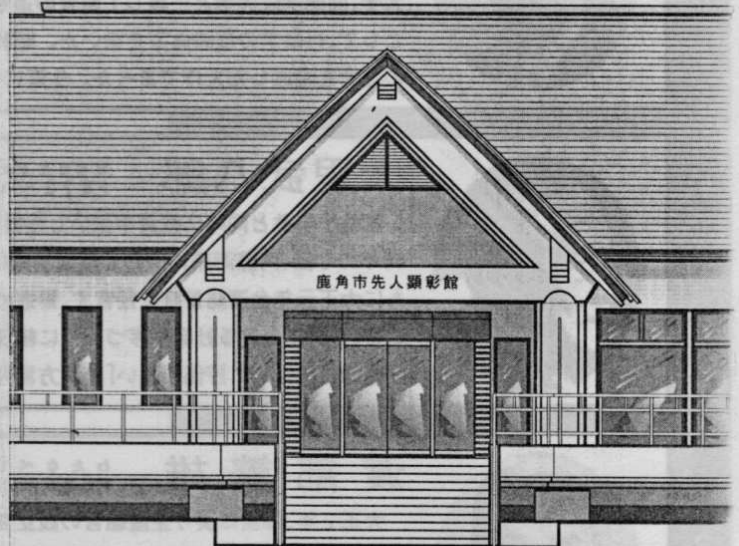
明治19年 5月13日、渡部康民・リツの長男として鹿角郡曙村石鳥谷に生まれた。
 明治43年 曙小学校、大館中学校を経て、中央大学経済科を卒業した。
 大正2年 丸善株式会社に就職したが、地元の強い要請により郷里に戻った。
 大正9年 曙村助役、村会議員、鹿角郡会議員を経て曙村村長に就任した。
 昭和12年 曙信用購買販売生産組合設立後、郡農村工場利用組合連合会会長就任。
 昭和19年 曙村農業会会長就任。養蚕・養鶏・青果物・木炭等の組合を発展させた。
 昭和38年 郡内11農協を合併、鹿角農業協同組合初代組合長となった。
 昭和41年 勲五等瑞宝章受賞。 昭和51年1月22日死去、享年90歳。

精神文化の礎を築いた人々…

先人顕彰シリーズ②

当先人顕彰館は、鹿角にゆかりの深い先人に関する資料の発掘収集、保存、事跡の調査研究と公開展示をいたしております。

世界的な東洋史学者「内藤湖南」、十和田湖の開発に尽力した「和井内貞行」の両氏をメインに常設展示し、さらに各界の先覚者を順次展示紹介してまいります。



鹿角市先人顕彰館 ☎ 0186-35-5250
〒018-53 秋田県鹿角市十和田毛馬内字柏崎3番地の2



小田島由義

おだしまゆうぎ
1845~1920

郡長として殖産興業に尽くした

13歳で小田島家の養子となり、盛岡に出て文武の道に励んだ。戊辰の役では花輪隊の総締役として出陣した花輪寸陰館長を勤めた後、工部省鉱山局に任官し国内の諸鉱山を視察し見聞を広めた。明治15年帰郷し家業の井桁家を継いだ。明治17年鹿角郡長となるや鹿角の将来の発展を図り、道路網の整備、養蚕やあけびつる細工の奨励、十和田湖養魚や醸造業の援助など多方面に渡って殖産興業策を立案し実行に移した。俳号を「雲樓」と称して句作を続け、さらに花輪桜山神社の創建、猿賀神社の調査など多方面にわたる業績を残した。



浅井小魚

あさいしょうりゅう
1875~1947

俳人・大湯環状列石発見者

本名は末吉、小魚は俳号。青年時代はキリスト教布教活動に熱中し、鍛冶を生業としながら俳句の創作に没頭した。生涯5万余の俳句を残した。中央・地方の俳人、碧梧桐、露月、井泉水、和風、桂月などと交友を深めた。昭和7年、大湯環状列石が発見されるや、その重要性に着目し、大湯郷土研究会の創立に参加して主査となって調査研究、保存活動の中心となった。晩年は鹿角の郷土史資料の蒐集にあたった。その資料価値は高く、多くの歴史資料の原典となっている。さらに俳画・スケッチを書き、郷土人形を作って観光開発にも力を注いだ。



田村徳治

たむらとくじ
1886~1958

日本行政学の創設者

花輪小卒業後同校準訓導を勤め、秋田師範、東京高師、京都大学、同大学院と進み、西欧留学を経て京大教授となった。京大に最初の行政学講座を創設した。昭和8年京大事件で退職後も、立命館大学、関西大学、同志社大学、関西学院大学と一貫して教育の道を歩みながら、深い哲学的思索と思考力をもって、日本行政学の先駆者として、行政学の理論体系を築いた。昭和29年発刊の「日本の興隆」は敗戦後日本の精神的崩壊を憂い、日本再建の理念を論述した大作であった。生涯にわたり自己に厳しく、他者には寛大で温厚な師父として尊敬された。



大里武八郎

おおさとたけはちろう
1872~1972

名著「鹿角方言考」の著者

花輪小卒業と同時に教員手伝いした後、上京し成立学舎、一高、東京帝大に進み法学士となった。明治38、39、41年の3回、内藤湖南に随行し清国調査に当たった。明治42年台湾旧慣調査員となり、台湾に渡り調査終了とともに大正元年台湾総督府に任官す。累進の後、台北地方法院長になって、昭和10年退官した。この間、旧慣習法を改め、台湾における社会秩序づくりに精魂を傾けた。退官後は若年より関心の高かった鹿角方言の研究に没頭し、学術的、民俗的に評価の高い「鹿角方言考」を発刊した。昭和42年、花輪町名誉町民第一号の栄誉を受けた。



渡部繁雄

わたなべしげお
1886~1976

地域農業の近代化を促進

大正2年、郷里に戻り生産組合の設立を手がけた。同時に村政の刷新にあたり、同9年には曙村村長となった。村の農業振興に熱意を示し養蚕・養鶏・青果物荷受・馬匹・木炭・森林等多くの組合を育成指導した。その結果、曙村が県内の養蚕・そ菜栽培の先進地となった。単に農作物を生産するだけでなく、その販売にも力を入れるなど近代農業経営を推進した。昭和38年には郡内11農協の合併強化をなし鹿角農業協同組合初代組合長に推された。南鹿電気K・K。鹿角医療組合の設立にも多大な尽力をした。